重修真書太閤記

十一編　八

晴

寶庫

和書門
類　三四〇五三
號　二二六
函　一三
架　四〇
冊

第七

内閣文庫
和書
類　三四〇五三
號　四〇
冊　一二
架　一七一
函

内閣文庫
番號　和　34053
冊數　40（38）
函號　171　45

新刊紹介

共四十

国立公文書館
National Archives of Japan

重修真書太閤記十一編巻之廿二

夏目舎人助再度高名の事

弁狩野中山武勇の事

夏目舎人助は八王子の本丸を責破り上杉の旗を
くゝり立てやと おめひ もこでよ 城門へいらんと もと
は処は陸奥守氏輝の室家の叔父 古尾谷流斎入
道とて 三十騎をあひ ひ 横地監物ろ介添として
本丸へ居たりけるが 武功の古兵士形つしゝ 真
先へ まさんて きつくいて 夏目を見て 大音よこゑ
やけ〳〵はい 抜れよ まくゝたすけ 若人い 越後衆と

見請たり。天晴の武者ふりかな。たゞ〜鎗のすゝ延たるそやいて入道ゝ。初陣より。からひ覚え〜手詰の鎗を合をへ〜ぢそこか退そといふまゝ〜みゝかい〜と。のけけい。あやまるな。夏目ゝ袖の菱縫の裏をかいて。ぢと突たりけり。舎人助手いおさ孫とも。口をゝやあの入道めゝ。口あかせ〜ことよと。鎗をひきて。入道ゝ眉間を見かけ。法き入るを。入道さいなうは剛のものゝ。場やぢ多きをのれ。とゝ〜沈むと見えけるゝ。夏目ハ鎗をひきたゝ〜城門の戸びらはそのゝ〜と立。入道これをらはよう。やゝ〜と打ひら延たる鎗い。手ぢめゝのぢをゝ損多〜と。むかゝ〜の

武士ハ。くちくせゝ。いゝ入るをのを。若武者ぢとハ。そゝ〜ぢらぬも理なり。御邊のその鎗二尺ゝ〜いくあらまゝ〜かい。入道をでゝ突れんをのをといひけゝ。舎人助實もとおもひゝ〜みや。鎗の柄二尺きうきて〜。いゝゝ入道どの鎗の指南の御禮ゝ誰みてもいれ。ひと突ゝ法きて。御感ゝありのらんと。うちぶり〜をゝ〜ぢ〜を。入道よびとめ。いゝゝ。いのきゝ入ゝこの入道を法きたまへやと。立向ゝを。夏目ゝ法よう。嗚呼ようかゝ〜。入道どの。戦場の故實をゝ〜ぢたまへのゝ〜ぢらゝ。こゝろの底まて。剛みゝて。すゝ其手さきの猛きを。若くはかりの御時ハ。おりひをら

われ〱・抔がしくは・軍は天下のいくさなり・入道どの
に・遺恨なし・まさ當の敵にもあらば・去ながら・余年の
いくさなどぞや・もはや落たまひて世をのがれたまへ
といへば・入道腹をたて・慮外なり小悴めこの入道
に落よとや・汝がこゝろに比へくるか・その儀ならば・
容赦せしと・いふまゝに・夏目をけらんと・もくろみ
けるを夏目いかにも・この老人も武勇の故實者同し
くは・生捕に捕まへやと・おめへは・まとこし去りて見
えし処を・藤田が手のもの・夏目がはきようかけぬ
けて・入道どのいざ御相手にと・莞尓と・わらふ入道
ぎつと是をうて・北國武士の下臈め・まとふるをれと

いひながら・鎗のまんなかを・二つ三つ・取てうちふる・
眉ようたらく・かゝけ突まはりけるが・この年頃の
手練の功・あやまたず・かの武士は・両眼の間を・ぬき
つらぬかれて・そのまゝ其処に倒れけり・夏目は・城
門をおさへけり・八王子本丸の一番のりと・よばゝれ
ば・かの孫て・さし圖をうけし・その上杉の旗をおし立
たり・古尾谷入道流齋は・今日をかぎりと・死をのぞく
はひに・まるゝまゝをれば・上杉勢多くうち入たり・入道
が内もまさかひし・三十騎も大やうに・討れその中は
六七騎になりけるを・入道一人は・手もおそれぬ・討
のおされしものの共を・ちかけて・横地は・何となる

しそ・先刻より・余程のあいだなるを・何度とて・戰ふ
やらん・処も・きら仮・死生も・まちどいるよや〳〵と・
たづ孫〳〵そ・さ〳〵めけ・横地どのふ・ハ・さや御落ハ
いと・申ふ・ちば・入道大ふ・いやう・籠城のそ〳〵中ふ
横地さかりハ・流石ふ道れ・ぢと・ふりひ〳〵そのう・卑
落〳〵とふ・ふくさもふく〳〵いろふ・せそやと・ふどろ
ひがう〳〵・憤れとも・をへき・様もふ〳〵・入道馬ふ・打
乘・大音あげ・ふれハ・武藏の國の住人ふ・古尾谷四郎
入道流齋と〳〵ひめうて・七十三歳・上杉勢のうちふ
我とふ・めらん人ハ・御出あそや・むか〳〵・風のいくさ
して・若き衆のうらひ草ふ・せぞやと・浮さう〳〵・切

く入・上杉勢ハ・ち〳〵めよう・この老人一人・何ぞの
とうあはへき・そのうへふ・夏目ふ・去きうふ感心〳〵
ひは・古實者ぞう・是をうひとも・てがらと・いきれ〳〵
あふ・ふと〳〵〳〵と・引ちゃへ〳〵〳〵けとハ・入道ふ
と〳〵〳〵・腹をたて・老ぬと・くふ〳〵きをのもふ〳〵・左樣
ふ・我等をあふどうたふ・ふ・年のやぞ・ふ・ふく法く
たふ故ぞる・我〳〵・いでそのやうふ・嫌ひたふ・老武者
の・死出三途ふ・ち〳〵めて・おもむく武者ふうを見た
ふへやと・いひ〳〵・鞆の上ふ・立あがう・塊をぬぎて
郎等ふ・ひ〳〵・鎧の袖をひきちきう・高紐きうて・胸
板ふ・〳〵さけ・腹十文字ふ・きらんとをふを・夏目舍人

助こゝをとそのまゝ・ちらるよう刀めの手を・去のう
と・取い・左の手ゑく・馬手指をぬくよと見のるよ・い
ちをやく咽のくさろを・突切て・息い・絶めまゝ・絶よ
けりこれをゑゝ・推かへゝ・おしまぬそのこそ・
おかりけれ・夏目ゝ郎・従・大場主膳・入道ゝ死骸を・掻
上・八王子の禅院ゑ・送葬ゝ相當の佛事を・修しける
とかや・兎かくをゝうちよ・加列勢森彦太郎・横山大
膳太田但馬守いのゑ・塀をのりこゑ・こゑ入
ちをいう・鎗を合せゝ・ゑとよ・敵ゑゝ味方ゑゝ討死
手負そのかぎをちゝ・城中ゑてい・中山狩野ゝ死物
くるひゑ・くゝをひまはる・その花々しゝは・敵味方の眼

を驚かしける・中ゑゝ・肥前守利長・小たゝを・所よう・
たしかゑ・見たまい・あの追かへしのをけしく・戦
かゑめのい・誰かゝ・降参のその中ゑ・かれらを
知たるめのいかをやと・たづ孫たまへい・中山勘解
由・狩野一菴と答ゑ・誰ゑても・入魂のそのゝらば・彼
等ゑ・肥前守利長ゝ・いゑべきこのあゝ・はをといへや
とのゝまへい・金子紀伊守・小岩井雅楽助・年久しく・
懇意せしそのゝ・利長をゝたまひ・はをとおそ・幸
ひゝ・そやく城ゑ入ゝ・両人をよくおしらへ・同道
しきゝとゝ・出立せしゑ・中山狩野ゑ・出めゑ・ゑと
軍して・今い息もきれたゝ・いや自害をへしとゝ・一

間所より引出めるまくろ静かに腹をきりたる出ろ
はに金子と小岩井と二人とも共に足さやかる中間
をさそらせ先案内を申入中間二人とも中山ろ九
へ参り門をあけよくと呼されども答ふるその
もなく金子小岩井さきさくろ見れとも門をい
さくかさめる音もせず内ろ落たるよやと門の
脇をおしやぶり入て見れば勘解由ろ妻手疵をひ
おかろ苦しけなる聲にて切れ見えたまへば金
子どのろよくも御入ひそのかた勘解由ハ子供二
人と助六ろ妻と城指出ろ逃ぬるも腹きりてハ自
ろ出おくらちにと自害しひ死ね申さん金子

の手をやり申度といふ大伐きく紀伊守いやとよ大
将のたをけたまへよろ御使ハ参アーろ出ろ
はに此時宜ふひ せめて御身たをやりたまひお
き人々の菩提をと半分いきせん大将の御はやひ
といふ所ハ金子殿ハ降参あるのはろ尤様
の侍の手ハやり申さんといひおかろ刀を取直し
胸元をはしりぬきて死してけり此中山ろ妻と
いふハ後藤主膳ろ女形ろ其の子助六といふハ後
に勘解由照守とのふ元亀元年高麗郡加治郷の舘
ハ生れしとい今年ハ廿一歳ろ弟を佐助信吉と
いふ此時二人とも陸奥守の供して小田原ハ籠ま

しかう助六が妻とハ遠山民部少輔が女なり後ハ照守をめして父が本領四百石ばかりたまはりしが次第ハ御恩を蒙り三千石をたまひ御旗の奉行となりしと御馬の師範ハ忠烈の孫枝繁昌して照守の玄孫ハいまだ一城の主となり三万石ばかり領せしまゝ照守の弟佐助信吉ハ常陸國ハ万石の禄を賜ひ一菴の嫡子主膳正祐範ハ小田原籠城の列なりけるが主膳がやさめし役所の前なる海上を五六艘の船さぎ通りけるを役所ハあるを八王子の勢と見なしかゝ此八王子ハて生捕り人々あり又是ハ中山勘解由が首と狩野一菴が首ハて

ひとて僧はめ〳〵せ中山助六狩野主膳ハまくハ御渡りしが父ハ對面あるへしといそせ二ての首の箱を沙のうへハ置けるとハ籠城せしものどもいかれも所の生捕の中ハ父やあぬ母やおもひとて心も空ハあるものをきけるが中ハのきて助六主膳の両人ハ父母とてはやくあるたまへらへを生て甲斐かしとそのちハ役所の番もおのゝやがて拾ひやせハあるゝのふとやや八王子ハて討死せし侍ハ荒井治部少輔照治同又左衛門尉照久市村小七郎行氏小林年人正次村岡半六郎貞久以下三十五人あり

とかや

野列佐野城をひる事

弁武列岩規城責の事

下野國足利郡佐野の城といふは鎮守府將軍下野大掾藤原朝臣秀郷十代の孫佐野太郎基綱ゝ住けるを始て佐野氏とよびひろ形ゝ一族ふか上佐野芝田戸室山越阿曽沼角折木村南摩小見舟越中江川久賀田沼飯田關口おとい川迄も人數持ふて佐野家の羽翼たゝ基綱十一代越前守盛綱ゝ代よりゝ關東分列して上杉方鎌倉成氏方と上ゝ川ゝ合戦晝夜やむ時なゝ是ゝ出いく盛綱も城をきゝきて不虞のそなへとなゝ

盛綱四代佐野小太郎豊綱のちふか隼人正といふ豊綱ゝ三人の男子あゝ長子か小太郎昌綱といふ家督たゝ次か天德寺の昌誉上人次か關口佐渡守綱之形ゝ去ゝ法名か天山道一といふよりく嫡子小太郎卒去法名か天山道一といふ天正九年佐野領内彦綱家をひ修理亮といふの城を上野舘林の城主長尾但馬守顯長のためゝ攻とられしゝ成無念ゝおもひ同十一年正月元日足利か押寄有無の勝負を決をへゝと評定一結ゝ木海道か人も去ゝとゝ路次も遠ゝ彦間郷よゝ名草へやくゝて押行か足利へ着まて太れゝこれを

おるとのあるまじきを形ろう元日は祝義の式多く大形油断の処へおしよせい敵はさめて狼狽しけへくやみい屠蘇の酔は足腰も立まじいはこの圖をさつのとおと下知しける処へ家老の大貫越中守氏之竹澤刑部少輔宮冬山上輝氏入道道及津符子右衛門兵衛朋業等一同に申けるやう正月元日は天下一同無事太平と祝しいはへいて合戰を企てらはゝ工とおろはへのらはゝ敵の油断は元日は限るまじ今一應御勘弁あらうまいかゝはへくしと申けれは宗綱以のおろ不興ふして奥へ入たまひけるろ駟も舌をよさんといふをあろさでみいくさの

方便を定めたろ事延引は及さくゝゃへいて敵はよせらるへしとさゝや打立めのとしとて天正十年十二月晦日丑刻近習馬まさろ百騎さかろ彦間の郷おゆゝ出て うちたまへい家老のそのとも何らい一人も後るべきおめゝゝは裝束して馬をさきとれい先陣後陣のそのあいゝ十町さかろもおくさたろ宗綱は血氣の勇者形ろ真さきみさゝゝさゝや足利の城門へいまおちゝと又所処は さくの林ゃいこの野中は貝吹たのさい此方より鐘をおらし又は銅羅をさろたて數百の人馬させちゃゝ中ゝゝ彦間の城代小曽根筑前守甲曽しさゝゝゝいゝ

小筒を取てゝかけむかひ、我れ〳〵へ寄たまふを、佐野の人々と見受たり、左あらんとゝ、ゆ〳〵おもひ儲けゝ〳〵とおてゝ、是ハ彦間の城の小曽根と申そのかを、用意の鉄炮をまゝらせゝ、そゝやといふまくは、きつくさかゝ、火蓋の音ふゝと、真さきをくんたる武者の胸板より、血けあらたてゝ、馬ふもたまらゝ、真逆さま落るを大勢うちかこゝ、ひく処へ、足利勢をい〳〵かけきたり、佐野勢をさうちらしてのち、小曽根ら、討ゝ、大将形ろうと、もく〳〵めてこゝる〳〵心はせ、足利方ふゝ、勝閧をあげて、万歳を祝〳〵けり、文佐野方おてゝ、大将横死のゝち、女子一人あゝて、家督の男子おゝいゝ、せんと評定しけるゝ、宗綱の叔父ゝの〻ゝ、天徳寺の昌誉上人ハ、佐竹の子息を養子ゝ、せそやといふ、家老の大貫越中守、竹澤刑部少輔、津布久右衛門、兵衛山上入道、飯塚、高瀬、小見ゝといふ人数のゝの共ハ、鬼やく北條一族の内ゝ、去かゝへ〻れといふ、よゝ、天徳寺ハ、いゝりて、上京〳〵、黒谷ゝ、ゝ、ゝ住〳〵けゝ、その〳〵ち、家老共の、こゝゝのまく〳〵、北條氏政の弟ゝ、ゝける、左衛門佐氏忠を以て、宗綱の女ゝめ〳〵せて、佐野の家督とゝ、ゝ〳〵やとも、佐野の家老とも、相ゝらゝて、静謐ゝらゝけるゝよ、氏忠ハ常ゝ小田原ゝ、ゝ

て佐野よあるに稀あるけるよりこの合戦出来りの
れハ氏忠ハ小田原の小峯といふ処を戍り居たろ
ーゃハ佐野よハ家老ども籠り居て尋常よ合戦せ
ざやと おもひける処へ関白殿下黒谷よりくも居
たりける天徳寺の昌誉上人をよびいざ〳〵佐野ハ
関東の名家あり断絶さべからず佐野の一跡御坊
ふたまえはとありけるよりよ天徳寺昌誉上人佐
野よ下り家老どもよ其の旨を申さとーたりけも
ハいかもとも異議よ及さず天徳寺を佐野よいれて
本主と仰ぎ〳〵ておとよ佐野城ハ弓矢の沙汰よ及ス
ず たちまちよ関白殿下の旗下とありよけりよ

上野國甘樂郡西牧の城よハ武藏國神奈川青木の
多米周防守藤澤の大谷帯刀左衛門尉とゆゑ居け
はを蘆田の松平修理大夫康國たく一手よく〳〵せめ
ける我多米大谷ともよ きこえし勇士形ろ もこー
も はちかど突ていく〳〵こく我専途とたくゃひなは
ろ寄手ハ大勢あり城方ハ小勢形ろ終ようちまけ
二人とも一足もひかざおかー枕よ討死ス蘆田ハ
他人をまーそ人一城を落をのこゃハ世よきこえ
たる北條方の大将二人うち取ーてさんろ信州の
蘆田右衛門佐の子不とありと関白殿下の御感あ
さからん我ともよろ又同國同郡石倉の城を攻なは

ゐ何とゝおのひけん石倉志さうゐ降を乞ゐよう修理大夫ゝれを許し城を請取石倉をよびて對面あるゝゝその座敷ゐて石倉ゐさゝかゐ心やすゝして修理大夫を討ゝゝけれい修理う弟新六郎康真とびゝゝ刀ゐ石倉をきうゝろゝその座ゐて兄の仇を復しけるゝ高運の侍なうと褒美ありて兄の遺跡をたまもうのちゐ上州藤岡三万石を領し右衛門大夫といゐさてゝ北條持の城々次第ゐ降參しまゝゐ落城しけるゐ武藏國足立郡岩槻の城ゐ氏政の末子氏直の舍弟北條十郎氏房の居城ゐう たゝし岩槻ゐ太田持資入道道灌の居

城ゐしてその子信濃守資家孫の子美濃守資頼その子美濃守資正入道して三樂といゐ四代相傳ゝ處ゐつゝう永禄六年正月下總國國府臺の軍ゐ打まけ常陸國ゐ出奔しけるのち岩槻ゐ三樂の長子大膳亮氏資の居たうしを北條氏康大軍ゐて攻ゝさうしゐ尋常ゐ防戦したうしゐとゝ城方小勢ゐるうへ次第ゐ落うせゝゝゝゐ氏資終ゐゐかゝうゝ氏康ゐ降參をきうゝゐゐ氏資同九年八月三舟山ゐ於て里見と合戦して討死し女子のゝありて男子ゐし よつゝ氏房を養子とゐし太田十郎と称せしゐう きうゝゐゐ氏房ゐ廣

澤尾張守・河合出羽守・細谷九郎・春日左衛門尉ふん
とをちゞめ・三千餘騎ゐて・小田原ゑ籠る・岩槻の本
丸ゑい・伊達與兵衛尉・二の丸ゑ妹尾下總守・太田備
中守・庄岡源太左衛門尉・宮城美作守等を籠たりけ
る・ゑいはゑ・天正十八年四月廿六日・淺野弾正少弼
・木村常陸介・本多中務大輔父子・鳥居彦右衛門尉・元
忠・平岩七之助親吉以下一万三千餘騎ゐて・十重廿
重ゑ・ちをかちゝ・攻やゝ・侍・梶金平・七里
鎗九郎といふ大剛のもの・たゝ二人・逆茂木引のけ・
ゝぎれいり・太田ゝ兵士を七八人・手の下ゑ・きつて
落ゝ・文い八尺ばかりの・金棒ゐて・うちひしゝぎ

ゝくいやひしげる・城中よりも・庄岡源太左衛門
と名乗て・討ていぐ・ゝ・ゝ・切合ゝ・ゝ・ゝ・
とやおもひけん・塀をこゑて・逃いりたり

重修真書太閤記十一編卷之廿二終

重修真書太閤記十一編卷之廿三

岩槻本丸合戰の事
幷本多平八郎忠政武勇の事

岩槻ハ籠る処の侍とも必死を致して よくこれを
まもりて太田十郎氏房のよく士を愛し民をもく
しゝ けるゆ故とも おのゝ此也 全く道灌齋入道の此
城を取立ける時よ末代をもめひたゝかうけるよや
城より二里の間の百姓どもよ籠城役といふことを
約しをそ外ゆ今ハいゝて用ゐ立しとやや抑
籠城役といふハ如何ゆるとなきといふよ まづ城を

はるを二里の間の百姓へ名字ばあさへ刀一本さ
ゝを後世はしたゝよろゝ名字免とゝ年貢四斗を
かゝ処ゝゝ一舟を四るし刀給とて男子十八歳よ
り六十三歳まてハ日々ゝ箭竹一本を納めしむ去
ゝよゝ城ゝ事あゝ時ハ名字の地下人ゝる刀を帯
て口々をまわゝ鳴子ば引て案内をおさしむかく
のゝゝおゝゝゝ形る仕置かゝ山ハ竹の根を掘とゝ
て堤の心ゝ用ひ松杉の株の土をゝらゝて焼松の
料とおしまゝ十七歳以下十三歳以上の地下人の
子供等乃草刈かゝをばきべゝ城よゝこれを渡し
年々ゝこれを新ゝゝおしゝ岩槻城の二里ゝ間

ゝと草刈籠の多さ処ハかゝゝとなゝ出くこそ
籠城のそゝめ箭竹のかゝば改めらゝゝゝ大凡百餘
万ゝをよひ焼松の料の松杉のかゝハ三十餘万あ
ゝゝとかや之の餘のそのゝゝ是ゝ准して推ちかゝ
へゝ是等ば以て籠城の防禦ゝあてしかばをでゝ
數十日ゝをよへとゝ城中出らゝゝ之しきその形ゝ
草かゝかゝを集めて堤の上ゝをき形らへおきれゝ
土砂塵芥を詰めて鉄炮をさゝかゝ楯と形ゝ松杉の
株を路ゝおゝよくきをゝて是ゝ火を付けしかハ夜
のかゝゝゝゝ焼ゝをよゝハ寄手ハ名ゝをハ武邊巧
者の人々おゝどゝゝ攻おくんてゝ出ゝをよけれ妻

ゐ・鳥居彦右衛門尉元忠の郎等・ゐ・寺田喜兵衛・安藤孫四郎・小田切又三郎・一宮左太夫かんといふ・死生をらぜの・剛のえの・中ゐも・安藤孫四郎もくゝ出て・申けるゝ・味方ハ大軍形つ・敵ハさへの・勢かるゝ・加やうゐ・城をまもつて・居るそやうゝ・そろ〳〵・一さ軍も・せけゝ・やゝ・ほそゝゐ・小田原落城ゐをよひかば・いろゐ面目おくゝ・あふまゝ・さや・軍ハ我等の・いくさから・孫と・恥辱ハ我等やちぢよゝ・形つ・いさや・一攻せめゝ見へさ形つとゝ・鳥居の旗ゝ・をゝ・たて・息をも・ゐつ・せけ・攻付ゝ・かハ・そや・新曲輪を・打やぶつ・隠居曲輪へ・ゝ・入けつ・城中ゐくハ・山口平

内・山角彦三郎・板部岡・佐枝おとハ・一人・當千の兵とも・そゝ〳〵・さゝつ・身命をすて〳〵・防きたゝかハ・已い刻より・午のこゝの終まて・敵味方入替〳〵・三十餘度の・合戦ゐ・正方勢も・をゝくうゝれゝ・城中ゐ・ても・今日をやきつと・死を・善道ゐ・守る・一足も引かたゝくめと・諫め合・たゝ〳〵・ゝめかやら・突合ハ・山口・山角穂坂・大炊助・鈴木市兵衛・おと・一人もの・おらけ・おかゝ・枕ゐ・討死・と・鳥居彦右衛門尉・これ・ゝて・安藤・寺田・小田切・うゝけかりぶけと・下知ゝけ・ゝへ・我劣らゝと・乗込たつ・文平岩の・攻口ゐて・ゝ・城中より・出ゝ・物見の・兵士を・追やけ・ゝ・ほかゐ・餘つゐ・手おげくおく

れて逃るへき道のかやうのけるゝよう案内者かさ
へ堀を引さらて城まへ寄手ゝ此くへ堀
々あさやうけるとく大勢ひさ〳〵と飛入〳〵渡
らんとすれへ堀ふかくして勢たゝ以あさてふさ
めく処を見さまし城中より鉄炮の筒さきを揃へ
撰打ふぞうちたう是ハ只一処あさき処のあるけ
るを知てそのうゝ引さ〳〵形う此也とも よせ手
大軍おれへ在家をおゝちて うち入〳〵足やう
をはくう終ハ塀きさるまいきややてこれを踏こ多
おめきはらんて責入十方よりうをて たくやゝた
ゞ本多中務大輔忠勝三の丸を取結總軍一度ハ攻

いれへ妹尾下總守 岸岡源太左衛門 をこ〳〵ゝさへ
かさ鎗を持くまちやけ敵をちら〳〵とひき付一度
ハ撞とはひくいで面ふらゝたくやゝたう敵味
方のいろ〳〵ゝ関をつくるゝ聲矢さけびの音天柱
たちまちはくぐけ地軸たゝいま折あんとはかり
と疑ふ妹尾岸岡手のものハむやつく申けるハ
たゝ〳〵ゝ今日をやさうの命ぞやゝ死てゝやく
てゝ死ぬる道ハ同ゝさ形う臆して子孫の面をけ
かをか一足ゝをくんて名を万代はのかせやと下
知ゝ〳〵いく度とかく突ていで火花をちら〳〵今
を最期とおめひさまへハさくがはちらいく敵もか

！こくよ本多平八郎忠政行年十六歳、真先みさ〜んて、敵は息ち〜ばかりなる、我はひ〜けと呼ばり〜鎗を入るをかをらく、妹尾・庄岡これをきこゝに、平八郎忠勝の子おるへ〜、我等ゝとうさく、相手ゝとは、も親氣おし見をてんとさしれ、きゝひや〜は、天晴日の出の若武者やと、深く感して、突おいけば、妹尾・古兵士おう、庄岡は大兵ゝく、大力形う、本多は若〜猛虎の羊をめてあるゝ如く見えけば、いろゝ〜たうりん、平八郎忠政、はきいさん鎗を受るん〜、手を負けるこれ、平八郎得たりと、踏込終ゝ妹尾をうちてうう、忠勝ゝ侍、三宅理兵衛、鈴木九左

衛門忠勝の旗を本丸ゝ、ぶ〜たて、ゝ諸方の寄手これ成るて、本丸をゝ中務大輔ゝ乗取たるそやはく〜と、込入たるゝ、庄岡源太左衛門尉、今ハ是まて、ゝう何まく命をたゝ人へきそ寄や人々といふ〜ゝ、八尺あまるの金棒を打ふり〜四角八面ゝ、たく〜き立〜、ゝどは、鳥居ゝ侍、寺田喜兵衛ゝ、こく〜庄岡源太左衛門、ゝとのきそと、聲かけて、四尺五寸の太刀を以て、渡るあゝ、双方きこえ〜大力ゝう、阿修羅王のあれ〜ゝ如く、獅子と、酔象のあらはるゝゝ似て、實ゝ目ぞ〜〜〜き合戦ゝう、庄岡ゝいらけく、打込金棒を、寺田やくへゝ引さゝ、せゝ寺

田ちさうくゝ力を片岡棒ふてさのゝと受る六十余合ちあひ〳〵はらは勝負も見えざるゝ寺田太刀を以てひらき合んとおゝけゝ処を金棒ふて肩先をうゝれけるゝ大力の打たるとおゝ寺田馬よう打をとちゝ血をさきて死〳〵たりけゝ安藤孫四郎一宮左太夫小田切又三郎片岡を打んとさゝゝ忠成見て片岡源太左衛門益おき罪造又おゝどゝ軍のおらひハせんやゝおゝ一所よゝれと呼さう〳〵かの金棒ふくたゝき立らゝ枕をおらへゝく三十餘人打死ゝ片岡ゝ手ゝ負ゝまゝ狂ひまさゝ処を本多ゝ手よう雨の降ことくゝちかくゝ鉄炮ふあぐゝ撃打ゝて倒ゝさゝゝ落車るそのゝおかゝけゝい良時ゝうゝまてのゝち立おゝ棒をとらんとさゝゝ誰といあらゝゝくゝれおい終ゝ首を打てゝう本多ゝ手よう三浦監物植村與三郎内藤源太左衛門永田甚右衛門童と出めいくゝまけるゝ三浦ハ山口平作ふ討れたゝ平八郎忠政これをゝて山口をゝたゝ一刀ふきゝく落を梶金平多門傳七郎山口嘉平七里鉄九郎等潮のゝく如くゝくゝけゝい本丸の大将伊達與兵衛宮城美作守太田備中守以下面ゝふらゝきゝく出平岩ゝ手へハけゝむハふ平岩の手のゝの妹尾片岡ふ多く

そろばきれいる恨あきい此ものどもを是非ま打
とう高名せんと無二無三まさるまやうけるま
ま々不思議かちたちのそのの脚をいためて一人倒
るれい三人三人いひ迯ひも同じやうまこけまろ人
馬ふくせそよとあせほよりも一鞭打て駈立るま
馬ハおどろ上りさ孫ま左ろけるまよう忽落馬し
我手の馬ま踏ひく足腰たゝ如何ぞといやくはか
事よとあきれさて能々見れい菱の根をさきまま
きまく時たるなういろまゝてかくさやう多分の
菱をたくへえゝまやといふは是も籠城役の内ま
つけらゝこの菱をさらひくのち心やすく進まん

と猶豫処を見まとまゝ弓鉄炮をきびしく打いざゝ
射かけゝやハ仇矢かくよせ手多く的ま立たく討
れいろ木村常陸介これを見て門よりまくめバこ
ま敵ハその用意をかして守るあ也脇より込入や
と下知しゝ真先ま立こ塀ま熊手をうちかけ
かけあやう飛下れい下ま穴あう附入手をいゝ
て苦しむあもい中城中よりうちいくれ礫ま中
つて倒るゝ此城二三の丸をい中をでる乗とう
本丸も大やく乗やぶつまこの詰の丸ま攻
落ととやくゝとく棄ておくへきまあらば去まても
何とせべきやと浅野弾正少弼木村常陸介本多中

務大輔・平岩七之助・一処にあつまり・軍の評議をかさ
ね・たろけう・はさも〳〵礫打のとき・この岩槻の地下
人の役みて・道灌齋の教置〳〵をかうとやや

木村常陸介智計の事

幷岩槻落城の事

木村常陸介勝成といふあり・近江源氏・木村四郎信成
の後裔なり・關白殿下・長濱の城主なり・いまさ・木下
藤吉郎と名乗たまふ時より・まいり仕え・後は蒲生郡
にて・屋敷を賜さり・馬淵村に住〳〵けるゝ・今は一城
の主として・數万の民を領〳〵けり・今度も浅野に添
て・軍の目付たり・木村浅野・本多平岩はむかひ・この

城を降さんとやうに・思ひ付てひ・よろこ・某一人
城中へ入りて・伊達と・一問答〳〵して見むやぞんとひ
各々は・何と思さるゝやと申けるに・弾正少弼・何さ
は常陸介の弁舌によろこ・城を降〳〵たまふ・忠節
たるへしと・一同に申けるに・常陸介たゞ一人
城門へ入りて・寄手のうちより・木村常陸助と申者
伊達どのに・面會をへき・要事のよし・参向せりと・い
させ〳〵かい・與兵衛尉さしをきく・落城旦夕にせま
るたるとい・與兵衛ういのちも既にのきたり・面會そ
の益なくひへども・左様にいはゝ・いかむべき
にあらん・此方へ御入ひへとく・城戸を開きいかか

常陸介臆をかし色やおく今日うち死とおもひ定て侍共の見ぬよりはおく客座はめき與兵衛尉草主の座はきて木村どのゝ御入来いろ〳〵事よやゝ承さらはやと申けれは常陸介扇を笏ゝとる直〳〵面々の軍ふうはとろ關東は名を惜せたまひ〳〵道灌入道どのゝ遺教とおぞれは死せる孔明生る仲達をさらはとと申ても不も〳〵似いよひてたのもしくはたゞ〳〵我等ゝ不審の第一条は道灌入道どのゝ遺教をはゝへたまふる面々は定めて入道どの重恩の人々たるへしさとれは只今常陸の庄野はやく住たまふ三樂入道どのをそ三世の主とたのみたまへるん尤へおく〳〵北条どのゝ子息たる十郎ぬをひさきらゝ主と仰きたまふとこそ心得やゝくはゝ山抑三樂どのを追いざたまふの大膳亮資房ぬゝは父よ捨むさ〳〵天罰のかとやゝく三舟山ゝ早世したまふの捨れはゝ心付たまふそ北條どのゝ子息を養子と〳〵三樂どのゝ背をたまへはいゝかる御心ゝやはらゝ捨の意を得はは今度をでゝ三樂どのゝ關白殿下へ参上あつゝく武藏國の本領を安堵したまへへこの岩槻も三樂どのゝ本領の内ゝてはきれはゝやゝ籠城ゝ今日は討死せんとい

きよぎたまへ寄手を關白殿下とおもひたまへ
や三樂どの殿下の仰をうけく寄たまへべけも
ど心相傳の面々へ北條まさがひたまへて只今
去らはべき郎後のかきさま〳〵我々ち〳〵め仮ま三樂
殿の勢とかろ罷向ていなこの間よう城中の人
ひとの武勇心心中のそども上方めの〳〵肝を潰〳〵
いへへ面々城たまとやへ臆〳〵たろといふ人あらん
やもや〳〵只今滅亡せんとをは北條一味のこ〳〵ろ
をひるがへ〳〵重代相承せ〳〵太田入道どのへ御參
ゐらんと誠の道とおろそ申べろしこの事申入ひ
きんため態と參りてはべ御暇申べ人々といひ

とて座を立を與兵衛尉おち〳〵と呼とめ何ま木村
どの我等ろ譜代相傳の主たる三樂入道常陸の国
野ふまやろ在ひ事をいづぞんじはへとも殿下へ出
仕していと更ま拙ん〳〵申さべ仰のど〳〵三樂入道
この岩槻をたまとろ入部ひそんふい我々何とく
入道ふ背き申べき去らしかあら今の十郎氏房と
申ひ主ふくひひ大膳亮資房ろこ〳〵ろふて增と
仕ま〳〵とおもい我々ためこ是ひ主たるを勿論
ふひ父祖累代の主君三樂入道と現在主君と仰き
し十郎どのいひげをいばもと別ゃく〳〵北條どの
の子息といふをの〳〵正〳〵三樂どの〳〵孫姫君

の壻なる三樂どのよりよろしく申て給はへ十郎殿無事よりくらせたまひ三樂どの御入部はもく今ふもあと我々城を出申へくはと云ける詞をて木村はをでよ說あんせたると心中よりよろこび與兵衛よむやひその事よはもく子細あるまゝ下野佐野も北條の舍弟ふく相續せしよ佐野の血脉たる天德寺の昌誉上人を召出され佐野一蹟を賜そう入部しはとも北條の子息たる左衛門佐氏忠ふは何のたくまもなくはきれを以ておもひめくらしはよ當方とても十郎どのよりやまひ有まくはと申しきはは與兵衛尉はまふも能々

甚弁して申入へくと申けるふよりて木村は本陣へ引かへしける跡ふて伊達與兵衛尉は太田宮城よむやひ何さも木村ろはいひはる如く三樂入道どの國府臺の軍よ打まけたまひ常州へ落させたまひしのち我々大膳亮どの逆心よ與しはるとその罪科はいろよ申ひらくとも三樂入道どの御赦あるへはらはは去ろはは今をてよ三樂入道は關白殿下の御許へ暇近ふしたまふと申へは何とく我ふれふ御目はけらはへきや今明日のうちよ入道どの御入部あらば我等を誅せらはへきと白あるべのらはは去ろとく大膳亮どのも主君なろ何とて

背きたてまつるべきといへどふも・我等が運の極め
なりといひもはてぬに・太刀をぬき・首をおとしけると
見えしが・たちまち前へかけ落き・宮城太田もあき
れはて・そのうへは・籠城の専なし・いそぎ・木村を
呼かへし・取あからんへしとて・木村を呼せけれは・
常陸介いまだ城門をいでざりしかは・直に
ひきかへし・此体をみて・あな哀れや・やうふなし申
べくも・何とてはいざし参て申へきや・口惜きことを
なしたりとて・木村も涙にむせびけり・伊達が死骸
をとり収め・そのゝち・宮城太田ハ・手のもの三百余
人を引具し・いそぎ取しめて・城を出たりけるとかや

や・又一説には・伊達與兵衛尉ハ・岩槻家老の内にて・
當時出頭なりけるが・武勇清くなく・本丸責の・さげ
しきに恐れ・からかさ城あげて降参をなし・一命を助
かりしとも云が・岩槻落城ハ・天正十八年五月二十
五日なり・葛原三右衛門尉といふハ・十郎氏房内室
の傳なりしが・小田原へまゐり・十郎へ申やう・落
城のゝち・御上ハ・三の丸に・おしこめられまし
しけは御文をとく出候をみれハ・
一筆申参らせ候・扨こなたと日夜の御なげきいかゞ
ろからぬ事にこそとなげきいらせ候ハんへハ
比地の事ハひたくしき上方勢むかひまて花く

又さいう形るうをめあも・あひなんやといふゃ
しく存ぜ・と・しよう共才ゃくふく・本丸二の
丸をおゆさ・ろうらおとい之の丸ふを・こ
められあ所事ゆ・ゆ・れん安くおそれされゆ
へ内色共いまくやをやらぬ事ゆそ・ゆ・
様いそき秀よ・将軍へ内そかさおされゆへた
もあらぬそとおらはを・・き責まあそせゆ
てこ後ゆ之めき罪ゆ・ゆめゆらんとの事
ふうけ色ハこよおういさ入なるいらをゆも
・あそれふもおそされゆそ・義理とやらんの
をちさへたうのをゆ・おそ・よさいよさるて

からひのへてこくめうとの父母妻子をとれたを
けおされよろ・くゆゆそ・くいくどこ
らゃとゆさんま・美をこめ系らをゆ

六月廿八日

めてたく
ろ・・
いくのき之の丸
小少将

十りさ毎まて
こゃゃ毎へ

此文例の殿下の偽作おるへ・まとみ女の文お
らい月日あるへのらゆ・かつ十郎さ毎といふ

所あるまゝきかう

重修真書太閤記十一編卷之廿三終

重修真書太閤記十一編卷之廿

太田美濃入道三樂齋の事

并奥州輝宗の事

岩槻の本主・太田美濃守資正入道三樂齋といふ。源三位頼政入道頼覺の後胤として。めつこうの楊雄の射法その娘椒花女よりの美濃守頼光朝臣より傳へ。をしたさへ。此家ふーるを重をきからひとかしたりけり。夫いいろ形る術かるや。此陣中みて。其やうをとこ。學ひ。見せよやーと殿下仰み三樂齋さんは。椒花女よりはさへたりーー弓は。八張

矢は二手・丈は其身の七尺五寸・十九束とは・弦の間
ばかり・挫陣・發向・五持作世をめ〳〵表裏ふまかちて・
八張なり・矢の尺は十二束・水破といふは・鳥獵箭お
ほ・兵破といふは・鏑箭股あり・この二ツを本として
多くは・鏃をつくる〳〵なり・さてこの弓矢を取ときは・眼大さ〳〵・肝ふと〳〵・かけたる蟲は車輪のおと〳〵
と見るほどに・ひとこゑを迫て見へ〳〵とあり・入道は・
無流ふと・直授の口決・面傳の次第まてはは及とも孫
と・流石この家は・学ひく御覽はいと申へ〳〵
とく〳〵・郎等は持せ〳〵・四所藤の弓おつとり・熊鷹の羽
の矢を手狹こ〳〵と・御前は下立はくの如く

足を踏て・敵は出はやはを挫陣といふ・陣列を挫衆と・
申さくはやはまく此膝をはくの如く折ても射くの踏
はいへ〳〵次はこの足を以て・尤着の[illegible]をはよく踏
弓は矢をはげて・鞭をうつは是發向の弓の体・文は鐙を
はろ〳〵ふと・鞆はやはつて・さもとはいへ〳〵・まさ
此弓を脇は横たへく・萱野を分る
時はなり・又この弓を杖はつき・此矢を背は立は負・
木の下闇をはくもあり・日暮・初夜・人定・後夜・日出の
時をさはく〳〵・射る者はいは・是をは五時の弓といふ・
あるひは・雨ふり・法は〳〵は弓矢をとり・胴結射て
矢當をためは・又は花はもあは・葉はもはは・目は見

しゝそのゝその城かけ是を射あてゝ拳をさゝむ是を時世の弓といわ世くゝ申てハ只弓の講談そやうおろいぐひと拳仕らんとゝいへハ郎等さゝ〳〵ろ得北條の紋ゆゝさとろ三角柏の葉をとろて竹の串ゆゝさゝえて的をたゝるとハ入道ハ弓を立ゝ的を見ゆめ其のゝち肌ぬき弓ゆ矢をうちくせきろきろと引出ぶろ矢聲とくゆゆ切てそかせハあやまさゝ三角柏の上やゝどを射きろゝあまゝ矢ハ弓杖三四十つゞてたろ御陣の垣ゆゝ止まるけろ入道氣色ゝて二の矢をはやひ出かゝ柏の右の角を射きろそのゝち三の矢をとろゝ左の角を

射きろゝ時向〳〵ハ串を射よとの上意あろ入道ハゝ〳〵まろ主際よろハ寸あけゝ射あてたろ〳〵入道ハ殿下御氣色よゝ〳〵嗚呼射たろ〳〵入道ハ禄給もんとゝ着させゆひ〳〵胴服ゆ大判五枚をそへられたろ入道御前ゆ出ゝよろ胴服を肩ゆうちかけ庭上ゆて弓を右ゆ取ろゝ聲たかく此弓ハ椒花女ろはゝさべ〳〵弓よ朝敵の首ハ水破兵破の矢ゆゝ〳〵ハといとろやろよ唱ひ〳〵袖うちふろゝ舞終ゆ御縁ゆおろよろ大判をはゝげ持懐中して退出ゝ關白殿下入道ろ弓箭の故實をきゝ〳〵め〳〵近習者ゆむかせゆひきゝ〳〵ゆるろ三

樂る先祖よりたくさんへたる弓の次第見たるおらんの藝の精妙なること沿供しぬふ廿餘方の勢の内ふ誰ろ三樂の片屋より立て出しおらふへさめるあるいぐよりいたせ〳〵と上意志そろ形る時石田治部少輔まやるいぐ御勢の中より誰ふても御免あるぞまやり出よと高聲より觸しかとも出れかり仕りはんとと申そめも形ろうかい關白殿下西國ふ射手ハ多さやぐ再應仰られし時ふ早川隆景の侍ふ真木上野介といふその伐いたつたる上野御前よりかしこまり關東の名家太田入道の仕り跡へ嗚呼の業仕りていそのわらひの種とは

扣えて罷在いひしろ再應の御意なろかいい西國ふ弓矢取そのすおさやとの仰よろ實ふ恐入ていへとも御前ふ伺公仕る是ハ新羅三郎の遺法ふて本間孫四郎資氏よろ相傳仕りひし我國上代の藝ふくい太田殿ふハ八張弓ふ二手の矢おとかいおらひいハ弓手右手出しめちろ三ねげ見おろしをべく五段の射法あろ坐立二ハふ分るよろ十段射とも申ハ矢ふハやぶら蟇目角木いさハさ殺矢の五ハハよろ弓手の遠矢を上覽ふ備ふへしといひりし弓矢を取て御前よりとく御前の杉の枝を打越そふろむかふよ見えるを在家の棟をこくろ

さ〜いふいと切くそかをそその矢三目のやぶらおとい・ヒウ〜と遠鳴し見ゆ〜ゆ屋の棟ゑ立たるけり・筭勘の達者長束大蔵少輔をめして・その間を校らとゆゑ谷をへぐて〜・九二百間余とはなりたる・その〜ち右手を試とゑひはく出〜あぢゆゑ・それを射るいけとも百間の外ゑそぐをはたる殿下ゑきろゑ御感まし〜けける・折ふし見あくゆ松の梢ゑ白鷺の集たるを・あとい如何ゑと御諚ゑよろ上野やーこまろ・膝打立て見あげの射法四五丈上ゑる鷺のつぎをを射きろたとい鷺ハやくはぢをを〜ゆ〜と羽うちつ〜・御庭へ落る拾取あげて

御覧ゑいゆ・残る一ゆゑ見出るしの射法何をる仕てんと見ゑとを折しも俄ゑ一天かき曇雷そくくめき大雨車軸をゆやしけとい殿下真木を近くめされ五段のうち一段のゑをい惜けれと雨かとい・せんやくなくと仰らゆ上野ゆ〜んて雨中ゑ射られぬ弓ハ犬の弓いさくろ苦しくいゆ・と言上し前ゆる谷の底ゑ雨をさけたる兎を見出し手先美事ゑ射とめたる殿下まを〜御感あるく御聲たるく上野衣たるをのい出とくぬとたる是を衣かへハへとく闇白殿下めしたる帷子御帯ゑて・そのまゑゑ賜そろて黄金五枚をそへらゑたる

隆景はゝ〳〵御前よむかひ〳〵こゝ入よ〳〵申上
きゝ〳〵ち上野をよびちゝづけいゝくも仕たゝ
と褒美〳〵て賞ハ歸國の上とゝ申度さる・はゝくまゝ
三樂齋を御座ちかく〳〵めゝ出されいゝゝ三樂そ
ゝゝハ關東ハての名家といひ文弓矢とゝて巧者
おゝと仰出さゝるゝハ三樂つゝ〳〵是ハ不思議の
上意かゝ三樂おとゝ軍といふハ勢ハ二千ゝ三千
ハとゝざゝ〳〵ゝ地ハ一村二村をあらそひ〳〵のゝ
郡一ゝの進退せ〳〵ゝゝ〳〵ひたとへ戦とれハ小児
のたゝむゝと抑御陣のさゝゝといへハ三樂おとゝ十
陪〳〵たる大名達幾頭とかく暫陣〳〵陣屋の休ハ三

樂おとゝの居城よゝゝとかゝゝ美々〳〵くハまこゝらかゝ
やうゝ目さまゝさ御いくさぶゝ我國ハいゝゝ
及さゝ〳〵唐土天竺いゝゝゝとゝゝくハゝゝ例をひゝん
かゝ〳〵以て意ゝ言葉ゝ及ゝゝゝと申上〳〵ゝ
ゝ關白殿下打笑ゝ世たゝひ三樂ゝゝ休息い
たせ又ゝゝ御對面ゝゝべきかゝゝと御懇の上意ゝ
ゝゝゝ処へ陸奥の伊達越前守正宗家老片倉小十
郎景綱を召具〳〵三千餘の軍兵をひきひゝく參上し
關白殿下仰出さゝれけるゝ小田原征伐のため春御
下向ゝゝ〳〵只今參上仕ると御不審さくかゝら
ハ去かゝら格別の思召を以てその罪科を勘ゝる

み及さん速み本國み罷かへり御旗をむかへ奉る
へ〳〵ちく〳〵その方近年切取処會津仙道を返上を
屋〳〵米澤三十萬石ハ元の如く領をへ〳〵と仰出さ
れ其〳〵ち殿下白衣のまゝ正宗找め〳〵出され諸
大名の陣所を御見せかされ其のゝう陸奥ゑて小
ぜう合ハ巧者かるべ〳〵とも加様形る大軍を
引よせ〳〵たるとあるまゝきかう猶見をへき所あ
る此方へきさ迄小性ども其の刀正宗ゑめさせよ
はのゝう共御供ゑ及さん仰られ只二人ゑて石
垣山の高うへ上らせられ出ぞ〳〵御物語あるゝ扨
のち御暇たまそる本陣ゑかへりを片倉小十郎景

綱まちうけ如何ゑまし〳〵けるゑやといハ正宗
かう〳〵と答えたまひけはをそくて景綱よりめ
りらしの大将軍やむかしも後も又あるまゝと主
従舌をふるうて歸國せる景綱ハ加藤次景廣の後
胤あう八郎左衛門尉景継信列片倉ゑ住ゝ去ハ
片倉と名乗ゝといハ正宗今年廿七歳勢ひをく〳〵耿
あう抜ゝ〳〵正宗の先祖ハ大織冠八代中納言山
蔭卿の末孫藏人朝宗そ〳〵めて奥州ゑ下向〳〵伊達
郡中村ゑ住々れハ伊達の藏人といハ其ゑとよう伊
達郡の兵士を領ゝけるハ其のゝち弾正少弼宗遠
う時ゑいくさう信夫荷田柴田伊具の四郡を合せ〳〵

といへ宗遠七代左京大夫植宗葛西大崎を取その孫左京大夫輝宗二本松の左京大夫義継と去ぬる合戰しけるゝ天正十三年十月八日不慮ゝ輝宗横死あり

大崎義隆の事

并伊達正宗小田原參陣の事

輝宗天正五年三十五歳ゝ家督あり二本松と云へ奥州管領畠山上總介高國の後なり高國の孫修理大夫國詮ゝ二本松ゝ住しけるゝ五代左京大夫義継の時ゝ伊達の所領信夫郡と二本松の領知安達郡ゝ堺を接しけるゝよりゝ出

相論して合戰ゝをよぶゝ信夫郡八町目ゝ伊達兵部少輔實光入道といへるあり義継といへ無二の懇意あり二本松と八町目とへゝかゝ一里卅一町をへだてたり義継大槻中務といへ郎從をして實光入道ゝ説しめ和睦の義ゝ去ぬるひ十月六日義継阿武隈川をわたり輝宗の陣所宮森ゝいたゝかゝ八日輝宗義継對面の席ゝ和睦やゝ化義継ゝ大兵の大力形り輝宗をいけどりゝ馬ゝのゝ引やへしけるを正宗追かけ高田と云処ゝ追ひめ義継を鉄炮ゝ討たゝりその王おやまりゝ輝宗ゝ出をよびしとかや大崎の

左衛門督義隆といふは八幡太郎三十一代の孫にして奥州一方の管領として志田・玉造・栗原加美・黒川五郡を領さ・たくしこの義隆といふは伊達左京大夫植宗の三男なれば輝宗とは伯父甥の間からかう・ちかはは義隆近習の小性は新田刑部といふその人ひとり天質美麗ふして二八の花の春まことは窈窕たるを天女の如くかうけるはよりて義隆これを愛し軍國の政はをこたりけはを以て家老どもこの刑部を遠さけんとをかうけるは義隆はく伊場總八郎といへる美少年はこゝろ伏うひ〳〵終は新田を外様よりぐ〳〵たる新田刑部は寵愛を伊

場は奪されしことをいかり伊場伐討ぐ〳〵うらこゝを晴さゞやとおしけるはよりて一門中を催促しけはは新田ら一族同心して・こゝ伐義隆は訴は義隆新田をめして事のよりを問たまひ〳〵伊場ら怒て新田をうらんをを怖れ鷹野の装束はく新田をおくりたまは名生と新田とは行程七里をへ〳〵たり新田ちかく〳〵かつ〳〵は今はこゝろ安〳〵とて義隆ひさかへしはをんとおしたまはを新田の一門是非はこの方へおもむ〳〵まひへと〳〵新田ら城は入奉る伊場は元よりの勢もあ〳〵一門とてもそろそろしいやらは磐手山の氏家弾正をたの〳〵か

氏家伊場を同道し名生の城へ上り義隆に訴へ申
ゝ所に義隆さては新田に入たまひし跡あらゝは
ふよう氏家伊場ハ名生にとゝまり義隆の養母及
び義隆の御前からひに若君を質として謀叛を企
て加勢を米澤に請申けるに氏家彈正ろ父の
三河守正宗の前に入いで名生の騒動やくの如し
かくて〻五郡の御仕置ハさるゝ〻ハかりく
左衛門督どの新田刑部に御まよひなりく累代の
家老たるものを伐とかゝ忠ハ〻ハ督のとの〻御
身の上心元おくぞんし奉ると申けるに依て天正
十五年正月十六日正宗一万三千餘人を引卒して

名生に發向し義隆の政事成たをけんとゝたまひ
けるに義隆大に いやうふくさ正宗ろ振舞かに い
て切処に うち出その不意を討て是成うち破らん
とその手配に及とゝれけるに家臣一栗兵部權大夫
といふものゝ義隆をいさめけるハ正宗の勢一万五
千とそ〻ゝ實ハ二本松勢成合せく三万ゝをよび
べし掛合のいくさにハかゝ人べからぬ要害に御て
めろいく謀を用ひ御合戦ハ成ろはへくしと言葉た
くゝに いさめける これハ一栗ろ家臣小松幸右衛
門といふものゝ子に幸太郎といふ美少年ありけ
るに成一栗たくひかをものに おもひ十三歳より手

元よめりたかひ寵愛あらんかぎりなく賜りたる
或年義隆鷹野よいでゝ一栗ゝへ
立寄たまひしかゝ兵部權大夫大よろこひさる
ぎ饗應かゝ配膳ハ幸太郎を出しけるに義
隆きれ見そひ終ハ大崎へめしゝたまひ伊場
總右衛門ゝ子とかゝ伊場總八郎と改名して寵愛
ゝたまひしを權大夫いろゝ無念ハおもひ
邑ハ出さ孫と義隆をそろゝして總八郎をとろ
かへさんとかくそそつまゝと後ハいかゝ知れ
たゝ然るに名生の合戰やゝと氏家彈正ハ磐手山
ハおもゝける紛れに總八郎を一栗ゝ手へ生捕た

る兵部權大夫大よろこひ深くかくして置しか
とも誰のゝとかく此事義隆の耳ハ入て けゝ義隆
ハかく一栗をかくしたまひいろゝおもしてこれを
討れゝばさやと種々ハ心を苦しめたまひ正宗
ハこれを謀られゝかとも正宗これをきく入たま
ふ必竟この亂の元を尋ぬるに新田刑部ハ起
たゝその新田ゝ寵愛を得といふ男邑ゝ今
まさ氏家彈正ゝ謀叛せしゝ伊場總八郎ゝ男邑ハ
ゝ車のゝ及ひ多くの士卒をくゝしめ
大切の農業をさまさけ其功何とも
ぞや是ハ去ゝ捨ぬ京打捨置たまへ申て

正宗さらよ取合たまふ義隆もせんやうさ形ゝ其
まゝ・ふ・おゝ・ひゝと・正宗ろ一栗兵部權大夫ろ城
ふむやひたまゝぬ城・拙ゝ兵部を恐逃たまふかと・
いふ人もなう
正宗を木の葉さるかと出めひゝは一栗をい落
さゝまゝろと落頃よ法くうゝ四方ふらさひしか
い・正宗やさよう
よきよのゝ見れい木の間の一い栗終ふい猿の
飼食おろべゝと作ゝかへゝ唱させゝとなう・然る
ふ・伊場總八郎ハ・兵部權大夫ゝめとよ・かゝゝ居た
つゝゝいとも・いろふも・新田刑部を恨ゝ・されを

殺さんと・一栗をゝのび出けるよ・新田刑部もまゝゝ
伊場を討んと・白糸の腹巻ゝ・猩々緋の羽織を着ゝ
黒き馬よ打のう・穂の長さ二尺・柄の長さ二間の鎗
をとろゝ・伊場總八郎ろかゝれたる処よ・さろて・
遂ゝされを討てけう・そのゝち・兵部權大夫ハ出羽
國ふ・立越寂上義光をたのうゝとやや・正宗法ひよ
二本松・大崎・一栗おとを合せ・百五十万餘を知行ゝ
ゝけるか・今度關白殿下北條征伐ゝて・小田原下
向の沙汰ゝさゝいゝ
きかゝとけるふ・各申処まちゝふゝ・あつけろ処へ・
佐倉小十郎きゝいゝ・何れふや・小田原へ參上ふ

かはへきよ〜戌・申をこかひけるみよう・はくこそ・
庄倉と共ま・小田原へ・参上か〜たまひ・ひかかを・是
ふは〜きて・佐竹といひ・結城といひ・東八箇國の名
家いの也も〜・膝を屈し手をとろく・軍門ま列を
ひく・その綺羅整々として・馬鞍ま・家々の紋を・志
る〜・旗の手ハ・箱根出ろ〜ま・おびきひく・十騎二十
騎百騎・二百騎・ひきたて〜〜・伺候して・さも〜の
土産を獻〜おくさめ奉る・と誠ま美々〜〜くも・まさ
めざま〜〜・四十年のそのむか〜・此小田原の小者
ふく・衣食まとぞ〜〜〜〜ま〜〜・けるとも・たのうきと
誰かい也らん・高運といふ・ふ也・かぎろあれや

天正十八年關白殿下・小田原を討ろぼ〜・みひ・
呼々を見物〜・あるきたまふ・時風まひろの里ま
て・さ〜・やうかる・茅の軒ま立寄たまひ・〜のと・い
ひ〜・婦やある・今ハ・七十ま越たるへ〜と・問たま
へハ・白髪の嫗・〜のまふくハ・尤仰られ・ハ・尾州の
日吉とのかと・申をきら〜め〜・いろまもその日
吉よと仰らと・その家ま・入御あ〜く・一日・鰯を焼
て・食ふるまひ〜・思をかへ・ととて・黄金一枚たび
〜とぞ

慶應義塾

重修真書太閤記十一編巻之廿四終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan